

介護老人保健施設ライフサポートねりま

症例概要 利用者氏名: 50歳代 男性 要介護○

病名: くも膜下出血

利用サービス: 入所

経過: 令和5年3月に意識障害にて救急搬送された。くも膜下出血と前大脳動脈瘤破裂を指摘されコイル塞栓術施行したが、その後左前頭葉内側に新規梗塞あり。同年6月下旬にリハビリ目的でねりま健育会病院に転院となり、ADL向上とリハビリ継続の目的でライフサポートねりまへ入所された。

内 容

本事例は、2024年12月より入所された。回復期病院でのリハビリを経たが、覚醒不良などリハビリが上手く進まないこともあり、両側下肢の関節可動域制限が強く残存し、ADLに2名介助を要するほど介助が残っていた。病前は現役でお仕事をされており、年齢的にもまだお若く復職も視野に入れリハビリを進めていたこともあり、当施設へ入所する運びとなった。

入所当初は日中離床しているも、同室のご利用者やスタッフともほとんどコミュニケーションをとらず、何事にも無気力・無関心な様子で生活されていた。移乗やトイレ介助の際は、両側の踵が床から浮き上がり、常に2名介助が必要であった。チームでは、身体機能向上によるADLの拡充と、生活場面で活気が向上し、少しでも楽しく前向きに生活して頂くことを方針に進めることとした。

身体機能向上を目的に、まずは下肢装具の調整を行った。それにより長下肢歩行練習や基本動作練習を有効的に進めることが出来るようになり、両側下肢の関節可動域の拡大を認めた。リハビリ以外の時間でも、余暇時間はナースやケアワーカーを中心に下肢のポジショニングを協力して行い、身体機能の維持・向上に努めた。日常生活での関わりの中でも、少しでも活気を持って頂く為に余暇時間は積極的に話しかけたり、体操や自主トレーニングの参加を常に促すように心掛けていた。

1月中旬頃にはADLの介助量軽減を認め、トイレや移乗動作が1人介助で行えるようになった。また、当初よりもコミュニケーションの中で発話が増えたり、笑顔が見られることも多くなった。

2月中旬頃には、リハビリ内でピックアップ歩行を使用し30m程度歩行が可能となった。基本動作の介助量も、軽介助レベルまで軽減を認められた。日中の体操に参加したり、リハビリ室での自主トレーニングを行う様子も見受けられるようになった。日を追う毎に身体機能の向上を認め、それに伴うように表情も明るくなっていった。退所する頃には、近くの食席の方と談笑されたり、スタッフにも時折ユーモアのある冗談を言って下さるようになった。

余暇時間も有効的に活用しながら多職種で連携してリハビリを進めていったり、活気を持ち楽しく生活して頂く為に積極的に関わるよう心掛けることで、入所当初よりもADLが拡充し、活気がある生活を送ることができた事例となった。